

木簡の年輪年代学

年輪年代学は、年代測定法として認識されがちですが、年輪曲線の照合により年代測定だけでなく同一材の推定をおこなうこともできます。年輪年代測定では、概ね100層以上の年輪を有する試料を対象とするのが一般的で、年輪数が少ない小型の木製品にその手法が適用される機会は必ずしも多くありませんでした。いっぽう、近年の成果として、一括性の高い試料群を分析対象とすることにより、年輪数が少ない小型の木製品でも、その試料群の同一材の推定を進めることができる事例が増加してきました。

このような背景のもと、現在、科学研究費の支援を受けながら、木簡研究へ年輪年代学的手法を導入する検討をおこなっています。木簡を対象とした年輪年代学的検討を進めることにより、木簡やその削屑の同一材関係の推定や、刻まれる年輪の新旧関係をあきらかにすることができます。その成果にもとづく木簡の接合検討をおこなうことで、例えばこれまで断片的な文字として認識されていたものが、単語や文として意味を持つものになる等、木簡から引き出せる情報の増大につながることを期待されています。

これまでの検討事例は、埋蔵文化財ニュース181号にて紹介するとともに、平城宮跡資料館のトピック展示コーナーにおいても展示中です。ぜひご覧いただけたらと思います。

(埋蔵文化財センター 星野 安治)



展示風景

八代市での水害写真資料レスキュー支援

本年7月の豪雨災害では人的被害だけでなく多くの文化財も被災しました。特に本年は新型コロナウイルス感染症の流行が重なり、外部から救援に入ることもできず、発災後約1ヵ月は文化財の被害調査や救援ができませんでした。

こうした中、被災文化財の救援に着手した熊本県教育庁から「埋蔵文化財記録写真資料が水没」と連絡が入り、対処と救済について助言するためメールでのやりとりののち、8月17日～18日に現地にて対処法の詳細について検討・協議しました。

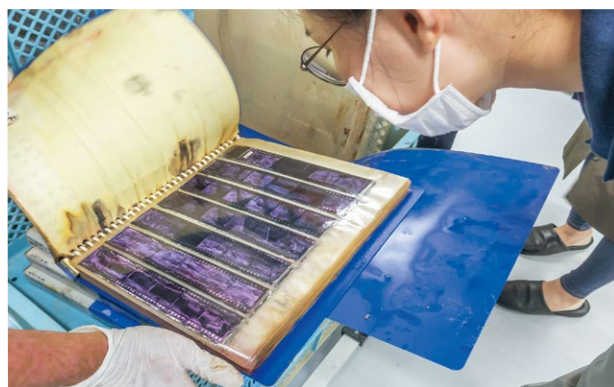
八代市の文化財資料が収蔵されていた施設は、建物の1階部分がほぼ水没してしまいました。水没部分に写真資料を収納したキャビネットが並んでおり、水が引いた後も先述のとおり救出まで1ヵ月近くかかりました。

写真フィルムが河川水に水没した場合、バクテリア等の微生物が写真の画像を形成する「乳剤」を腐敗させてしまうため、すみやかに洗浄・安定化する必要がありますが、1ヵ月あまり着手できなかったため、多くの資料は救済不可能でした。

このような中で現地入りして検討したレスキュー内容としては、①救済できるかできないかの選別、②救済できるものは冷凍保存で腐敗停止、③資料内容の重要度順に救済処置(洗浄～安定化～乾燥～デジタル化～収納)といった流れです。

文化財の災害については記録類も同時に被災することが多くあります。特に写真資料については非常に脆弱で、日頃から防災意識を高めて収蔵場所や環境に注意する必要があると改めて感じました。

(企画調整部 中村 一郎)



被災した白黒フィルム 腐敗し救済は不可能